



名大トピックス

No.137 平成16年10月30日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
http://www.nagoya-u.ac.jp

「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」設立記念 男女共同参画社会推進シンポジウムが開催される



「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」及び 「海外先進教育研究実践支援プログラム」に採択される（4～7頁）

CONTENTS

・「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」設立記念男女共同参画社会推進シンポジウムが開催される...	2	・大学院情報科学研究科が公開セミナーを開催.....	18
・平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」に採択される.....	4	・オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」が開催される.....	19
・平成16年度「海外先進教育研究実践支援プログラム」に採択される.....	7	・大学院環境学研究科が創設後初めての外部評価委員会を開催...	20
・平野総長と山本副総長がパリ第7大学及びボンゼシヨセ工科大学を訪問.....	8	・医療安全講演会が開催される.....	21
・大学院留学生特別コース学位記授与式を挙行.....	10	・博物館が「戦前の脳外科手術フィルム」の寄贈に対して武田薬品工業に感謝状を贈呈.....	22
・大学院文学研究科が21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」第4回国際研究集会を開催.....	11	・大学院生命農学研究科が農業ふれあい教室を開催中.....	22
・泉文部科学省審議官が本学を訪問.....	12	・附属農場が平成16年度農業教育公園・講演会の第1回を開催...	23
・「東海医療情報ネットワークコンソーシアム」設立式典及び設立記念シンポジウムが開催される.....	13	・農学国際教育協力研究センターが2004年度第5回オープンセミナーを開催.....	23
・エコトピア科学研究機構が寄附研究部門の創設記念式典等を開催.....	14	・平成16年度職員体育大会が開催される.....	24
・祝！全日本大学駅伝に出場決定.....	15	[新任部局長等の紹介].....	24
[研究ナウ]		[名大を表敬訪問された方々]平成16年7月～9月.....	25
・乾燥地を中心とした人類文明史像の再構築 嶋田 義仁.....	16	[キャンパスクローズアップ] 4 理学館.....	26
		[INFORMATION]	
		・名古屋大学関西フォーラム.....	28
		・イベントカレンダー.....	29
		・本学関係の新聞記事掲載一覧（平成16年9月分）.....	32



「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」設立記念 男女共同参画社会推進シンポジウムが開催される

- 「すみずみまでゆきわたる男女共同参画」を目指し、知恵と力を結集 -

「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」の設立を記念して、男女共同参画社会推進シンポジウムが、8月27日(金)野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。

このフォーラムは、愛知県、名古屋市、愛知県経営者協会、連合愛知、本学の5者が連携し、男女共同参画社会を推進することを目的として設立されたもので、今後、研究会(シンポジウム等)や情報交換、調査研究など、社会全体の男女共同参画推進に寄与する活動を行います。

第1部では、同フォーラムの設立記念式典が、愛知県県民生活部社会活動推進課男女共同参画室長、名古屋市総務局総合調整部男女平等参画室長など各会員の代表者が出席して行われました。初めに、フォーラム会員を代表して、平野総長からフォーラム設立の宣言がありました。平野総長は、設立宣言の中で、「私たちは、この地域における『すみずみまでゆきわたる男女共同参画』を目指し、本フォーラムに各自の知恵と力を結集します。また、男女共同参画においてはもち

ろん、広く社会科学・人文科学系のテーマによる、このような産学官連携の枠組構築は、全国に先例がなく、本フォーラムには、この分野における産官学連携のパイオニア的な役割が期待されているとも言えます。したがって、本フォーラムは、愛知県にとどまらず我が国における男女共同参画社会実現に貢献する可能性を有しているのです。男女共同参画の試みが文字通り『すみずみまでゆきわたる』ためには、産学官の連携にとどまらず、産学官『民』連携の方向を目指してゆくことが、将来的な課題となるでしょう。」と述べました。また、来賓の名取はにわ内閣府男女共同参画局長、本学工学部卒業生の田口 康文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課地域科学技術振興室長からフォーラム設立へのメッセージをいただきました。

第2部では、「男女共同参画社会のヴィジョン - 産学官連携で考えるあたらしい社会のかたち -」をテーマに、シンポジウムが開催され、学外者51名を含む173名の参加がありました。初めに、伊藤公雄大阪大学大学院人間科学研究科教授が「なぜ、今、男女共同参画



フォーラム設立の宣言をする平野総長



熱心に聞く参加者



祝辞を述べる名取内閣府男女共同参画局長



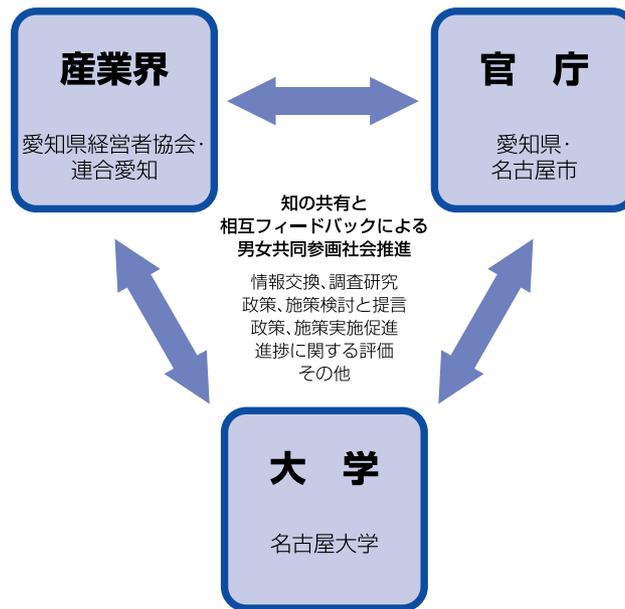
祝辞を述べる田口文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課地域科学技術振興室長

なのか？」、田淵六郎環境学研究科講師が「男女共同参画社会における家族とは？」、田村哲樹法学研究科助教授（男女共同参画室員）が「どのようにして男女共同参画社会を実現するのか？ - 言説戦略という視点から - 」と題して、男女共同参画社会の将来像について報告しました。続いて、男女共同参画社会実現のための取り組みとして、宮崎直樹トヨタ自動車株式会社人事部長から、同社のダイバーシティ・マネジメント戦略の一環として、昨年、今年と続けて設置した事業所内

保育所について、また、束村博子生命農学研究科助教授（男女共同参画室員）から、大学内保育所を検討中の本学の状況について報告がありました。報告後に行われた討論では、参加者から問題意識の高い発言が相次ぐなど、大変意義のあるシンポジウムとなりました。

なお、このシンポジウムの記録は、男女共同参画室ホームページ（<http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>）に掲載する予定ですので、ぜひご覧ください。

すみずみまでゆきわたる男女共同参画をめざして



あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム



平成16年度

「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」 に採択される

平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の審査結果が9月14日(火)、公表され、本学からは、単独申請した「自分の技量を随時確認できる多様な環境構築プロジェクト」、本学が主幹事校として共同申請した「実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト」、本学を含め10校で共同申請した(京都大学が主幹事校)「実務基礎教育の在り方に関する調査研究プロジェクト」の3件が採択されました。

法科大学院等専門職大学院形成支援プログラムは、今年度からの文部科学省の新規事業で、新たな法曹養成制度の中核的機関となる法科大学院をはじめ、経営管理、会計などの各種の専門職大学院において行われる教育内容・方法の開発・充実等に取り組む優れた教育プロジェクトを選定・公表することによって、それぞれの専門職大学院が選定されたプロジェクトを参考

にし、教育内容の充実のための取組を促進し、高度専門職業人養成の推進を図るとともに、我が国の国際競争力の強化・向上に資することを目的としています。

今年度は、教育の高度化による制度の発展を目的とした特色ある教育プロジェクトを募集する「教育高度化推進プログラム」と実践的な教育の推進を目的とした特色ある教育プロジェクトを募集する「実践的教育推進プログラム」が設定され、国公立の専門職大学院から127件の申請があり、「教育高度化推進プログラム」の30件、「実践的教育推進プログラム」の33件が選定されました。本学で採択された3件は、大学院法学研究科から「教育高度化推進プログラム」に応募した単独教育プロジェクトと共同教育プロジェクトです。なお、法科大学院については、設置校68校のうち61校から申請があり、45校が選定されました。

平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」採択一覧

プロジェクトの名称	申請単位	申請担当者	取組部局
自分の技量を随時確認できる多様な環境構築プロジェクト	単独	松浦 好治	大学院法学研究科実務法曹養成専攻(法科大学院)
実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト	共同*1	菅原 郁夫	大学院法学研究科実務法曹養成専攻(法科大学院)
実務基礎教育の在り方に関する調査研究プロジェクト	共同*2	京都大学 (主幹事校)	大学院法学研究科実務法曹養成専攻(法科大学院)

* 1 本学が主幹事校として申請を取りまとめ、早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、同志社大学、大阪大学、岡山大学、広島大学、香川大学、熊本大学、鹿児島大学と共同申請した。

* 2 京都大学、東北大学、東京大学、一橋大学、神戸大学、中央大学、早稲田大学、関西大学、関西学院大学と共同申請した。

「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の概要

1) 「自分の技量を随時確認できる多様な環境構築プロジェクト」(単独申請)

本事業は、学生自身がどこまで専門知識や専門技能を修得したのかを随時自覚できる多様な環境を構築し、学生が構想力や協同性などを含む能力開発をしながら法曹になる努力を続けることのできる機会を提供することを目的とする。

このような目的を実現するために、大学内外の法律家や専門家を動員してITを活用した以下の5つの要素プロジェクトを展開することによって、到達レベルを測るための多様なデータを提供して、学生には自己研鑽の環境を創造し、教員には付随的に教育方法改善の手がかりを与え、プロセスで教育効果を評価するという法科大学院の教育理念を具体化する。

5つの要素プロジェクトは、(1)「お助け君ノート」(講義やゼミの議論のポイントであると学生が判断して、パソコンのキーを押すと、同時デジタル収録中のビデオに検索情報が記録されるシステム)、(2)「法的知識理解度確認システム」(ウェブ上の択一問題システムを改良し、理解度データを提供するシステム)、(3)「文書作成技能確認システム」(文書作成、口頭発表能力の習熟度情報を提供するシステム)、(4)「Study Group 支援システム」(ウェブ上にクラスや学年を超えて「協同して学ぶ」環境を提供するシステム)、(5)「学生用 e-portfolio」(学生が自分の多様な学習内容を記録し、自己研鑽に生かすシステム)から構成される。

2) 「実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト」(共同申請・主幹事校)

法科大学院では、実務法曹養成を目的とすることから、従来の法学教育にはなかった面接、尋問、交渉等の専門技能に関する新たな教育科目が登場した。そのため、各法科大学院のカリキュラム中には、法実務場面を想定したシミュレーションやロールプレイといった新たな教育手法が導入されている。しかし、こうした手法は従来の法学教育ではほとんど行われてこなかった領域であるために、教育方法論、教材、人的リソースの全ての面において蓄積がない。そこで、本プロジェクトは、名古屋大学を中心に、既に関済済みのITを活用した法的専門技能トレーニング環境をもとに、プロジェクト参加校との間で模擬裁判、ロイヤリング等の科目に用いる映像教材共有化を試みる。そのような教材共有化の試みを通じ、本プロジェクトにおいては、新しい専門教育家育成理論の開発、専門技能を教育できる人材の育成、映像教材の開発・蓄積などを行い、その成果を多様な形態(映像、音声、スライド、テキスト等)の教材としてまとめ、プロジェクト参加校間で共有するデータベースを構築する。

3) 「実務基礎教育の在り方に関する調査研究プロジェクト」(共同申請・参加校)

法科大学院における実務基礎教育に関し、民事実務、刑事実務、公法系実務、臨床系の各分野にわたって、現に実施されている教育内容を調査し、早急に対応することが必要な諸課題(法律基本科目との関係の明確化、事実認定教育の方法、臨床系教育をめぐる各種の問題等)について検討するとともに、中期的・長期的課題(司法修習との関係、法科大学院のカリキュラム全体との関係、必修科目の拡大の可否等)にも取り組む。その方法として、各法科大学院における実務教育の実態を調査し、その結果を踏まえて検討を行うこととする。このような調査・研究を効果的に行うために、個々の法科大学院を超えたインターカレッジ(いわばインター・ロースクール)の調査研究グループを組織する。これらにより、理論と実務の架橋を図り、プロセスとしての法曹養成の中核を担うという法科大学院の理念を実現するために有効な実務基礎教育の在り方を提示する。





平成16年度

「海外先進教育研究実践支援プログラム」 に採択される

平成16年度「海外先進教育研究実践支援プログラム」の審査結果が9月16日(木)、公表され、本学からは、申請した5件すべてが採択されました。

海外先進教育研究実践支援プログラムは、大学等の教職員を海外の教育研究機関等に派遣し、先進的な研究や優れた教育実践に参画させることなどにより、教育研究能力の向上を図る優れた取組を選定し、財政支援を行うことで、高等教育改革を一層促進させることを目的として、昨年度まで実施されていた在外研究員制度に代わり、今年度から実施されるものです。在外

研究員制度が、教員個人の教育研究能力を向上させるための制度であったのに対し、同プログラムは、大学等のビジョンを基に教職員を海外の教育研究機関等に派遣し、大学等の教育の改善に資する取組を支援するものであるという点に違いがあります。

今年度は、国公私立の大学・短期大学・高等専門学校169校から780件の申請があり、海外先進教育研究実践支援プログラム選定委員会における審査の結果、520件が採択されました。

平成16年度「海外先進教育研究実践支援プログラム」採択一覧

申請者	所属・職名	専門分野	取組名称
鈴木 繁夫	大学院国際言語文化研究科・教授	文 学	言語文化教育における語り手法の研究開発
阿部 英嗣	大学院工学研究科・助手	工 学	医工融合領域教育人材養成プログラム
鳥居 朋子	高等教育研究センター・講師	教育学	教養教育カリキュラムの開発手法の研究
大谷 尚	大学院教育発達科学研究科・教授	教育学	研究重点大学のプロフェッショナル教育
阿曾沼明裕	大学院教育発達科学研究科・助教授	教育学	研究重点大学のプロフェッショナル教育



平野総長と山本副総長が パリ第7大学及びポンゼシヨセ工科大学を訪問

平野総長と山本副総長は、9月9日(木) パリ第7(ドニ・ディドロ)大学を訪問し、大学間
学術交流協定の締結を行うとともに、今後の両大学における国際交流の促進等について意見交換
を行いました。また、9月10日(金)には、ポンゼシヨセ工科大学を訪問し、本学との授業料不
徴収に関する協定(実施細則)の締結を行うとともに、両大学における国際交流の促進等につ
いて意見交換を行いました。

◆パリ第7(ドニ・ディドロ)大学訪問

2004年9月9日に、平野総長及び山本副総長は、フ
ランス国パリ市内にあるパリ第7(ドニ・ディドロ)
大学を訪問し、本学との学術交流に関する協定を正式
に締結した。締結に際して、パリ第7(ドニ・ディドロ)
大学側から、Eurin 総長、Germain 副総長(国際関係
担当)並びに関係教員2名が参加し、Eurin 総長が協
定書に署名した。Eurin 総長の専門は医学である。

パリ第7(ドニ・ディドロ)大学はフラン
ス国内有数の大学の一つであり、人文学、(自
然)科学、医学を3本柱とする文理兼ね備え
た総合大学で、教員・研究者数は約2000名、
学生数は約2万6千人の国際的にも高い評価
を持つ大学である。本学とは、古くから研究
者間の交流が行われており、現在に至るまで
活発な研究交流が続いている。昨年、多元数
理科学研究科から提案した21世紀COEプロ
グラム「等式が生む数学の新概念」が採択さ
れ、この交流が学生および若手研究者を含
交流へと拡大した。そこでこれを促進するた
めに、全学協定を締結することとなった。全
学協定の枠組みは作るが、当面の交流は数
理科学を主とすることとし、関係研究科と
して多元数理科学研究科と情報科学研究科が実施

部局となる。なお、学部学生の交流については、語学
の問題があっただちに合意に至ることが難しく、現
段階では大学院生に限る学生交流をすることとしてい
る。当面の交流窓口の担当責任者は大学院多元数理科
学研究科の宇澤達教授である。

当日は、友好的な雰囲気の中で、両大学の概要の紹
介や当面する課題について話し合われるとともに、今



パリ第7大学との学術交流協定締結の様子
左から平野総長、Eurin パリ第7大学総長

後の両大学の交流拡大についてもその可能性について話し合われた。その後、本部事務局内の案内見学が行われ、現在移転中で2年後には新キャンパスに移転す

る予定であることが、実地説明された。受付ではパスポートの提示と預託が要請され、当地でのセキュリティの厳しさを知ることができた。

◆ポンゼシヨセ工科大学訪問

2004年9月10日に、平野総長及び山本副総長は、フランス国パリ市内にあるポンゼシヨセ工科大学を訪問し、本学との授業料不徴収に関する協定（実施細則）を締結した。締結に際して、ポンゼシヨセ工科大学側から、Courtier 氏（Director）、Neveu 氏（Deputy Director）、Chupin 氏（Assistant Director of Research）、Cammarota 女史（International Affairs Department）、Vitou 女史（Communication Department）、Jelassi 氏（Head of MBA-ENPC）等、が参加した。

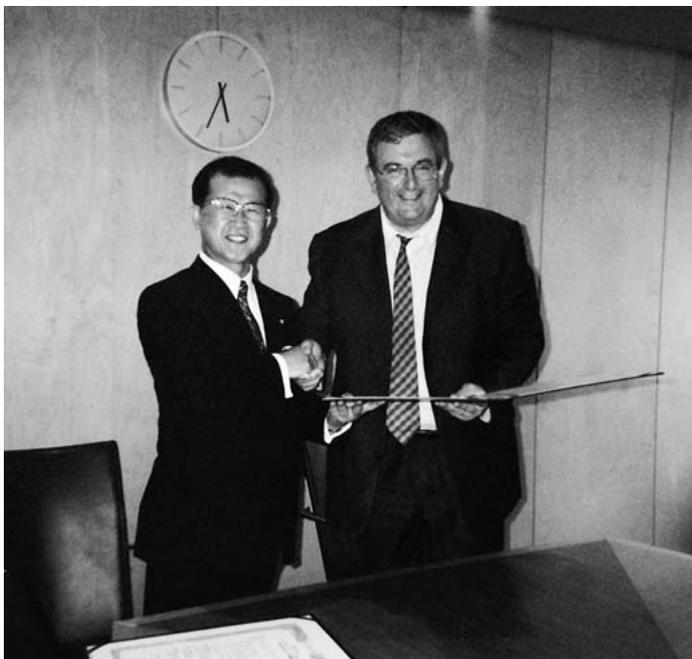
ポンゼシヨセ工科大学は、250年以上の歴史をもつグランゼコール（高等大学）で、9つのグランゼコールの中でも、唯一フランス革命前に創設された最も権威ある学校である。名古屋大学とは、平成11年に大学院

工学研究科がポンゼシヨセ工科大学の国際経営大学院と相互交流協定を締結し、現在では全学協定を締結している。また、AC21のSTC（運営委員会）メンバー校でもある。

訪問時には、まず初めに、Courtier 氏から名古屋大学の代表の訪問に対する歓迎の言葉が述べられ、それに引き続き、ポンゼシヨセ工科大学の沿革と概要、教育と研究体制、等についてプレゼンがあった。名古屋大学については、平野総長が、その沿革、法人化後の体制、国際交流についての基本的考え方等、のプレゼンを行った。その後、Mouchel 氏（Head of Water, city and environment teaching and research centre）と Sportisse 氏（Head of Atmospheric environment teaching and research centre）から各センターの研究内容と活動についてプレゼンがあり、質疑応答を行った。それに引き続き、Jelassi 氏から、名古屋大学における ENPC-MBA の目的とするところ等についてレビューがあり、それに対して平野総長から現状説明を行い、出席者で意見交換を行った。また、インターンシップの提案や単位互換についての検討があった。

これらの後、平野総長と Courtier 氏で実施細則に関する協定の署名が友好的な雰囲気の中で行われ、これを祝って、関係者でシャンパンにて乾杯した。また、その後、大学内を短時間であるが見学した。夕刻には、ポンゼシヨセ工科大学主催のディナー夕食会がルーブル美術館近くのレストランにて開催された。

（この文章は、山本副総長に執筆いただいたものです。）



授業料不徴収に関する協定締結後、握手をする平野総長とポンゼシヨセ工科大学の Courtier 氏（Director）



大学院留学生特別コース学位記授与式を挙行

「大学院法学研究科、医学系研究科及び工学研究科留学生特別コース学位記授与式」が、9月24日（金）豊田講堂第1会議室において、総長、理事、研究科長の列席のもと挙行されました。

本学には、現在、大学院における外国人留学生のための英語による特別コースが、大学院法学研究科博士課程（前期課程）総合法政専攻、大学院医学系研究科修士課程医科学専攻、大学院工学研究科博士課程（後期課程）社会基盤工学専攻及び大学院環境学研究科博士課程（後期課程）地球環境科学専攻で開設されており、平成9年度からは、海外の入学・修了時期に合わせ、9月に学位記授与式を行っています。なお、大学院環境学研究科博士課程（後期課程）地球環境科学専攻については、平成14年10月に前期課程から後期課程となったため、今年の修了者はいませんでした。

授与式では、修了者のうち、大学院法学研究科の6名及び大学院医学系研究科の9名に修士の学位記が、大学院工学研究科の5名に博士の学位記が、平野総長から一人一人に授与されました。

次いで、平野総長から本学での課程を無事修了されたことへのお祝いの言葉と、本学で学んだ知識や技術をさらに研鑽し、母国のみならず、世界の発展のため



あいさつする平野総長

に働くという気概を持ち、一層努力されることを希望する旨のはなむけの言葉が贈られました。

これを受けて、修了生を代表して大学院法学研究科のウルグベック ハイダロフさん（ウズベキスタン）が、日本での研究生生活、指導教員や学生との交流など留学中のエピソードを交えた謝辞を流暢な日本語で述べました。

閉会後には、総長をはじめとする列席者、陪席の指導教員、留学生の家族や友人を交えて記念撮影が行われるなど、厳粛な中にも和やかな雰囲気となりました。



平野総長から学位記を受け取る修了生



式に臨む修了生



大学院文学研究科

21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」 第4回国際研究集会を開催

- 歴史テキストの生成：テキスト／コンテキスト -

大学院文学研究科は、9月16日(木)、17日(金)の両日、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、トヨタ自動車株式会社の協力を得て、21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」第4回国際研究集会を開催しました。

21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」は、佐藤彰一文学研究科教授をプロジェクト・リーダーとして、平成14年度に人文科学分野において採択されたもので、本学では唯一の文系の21世紀 COE プログラム拠点です。このプログラムは、人間が様々なかたちで実践しているコミュニケーション行為やその結果を『テキスト』として考え、そのテキストに共通して存在する「普遍文法」がどのようなものを究明することを大きな目標として掲げ、史料部門、思想テキスト部門、文学テキスト部門、図像テキスト部門、音声・身体部門、言語学部門の6部門を設定し、プロジェクトを推進しています。国際研究集会に関しては、平成15年に思想テキスト部門、言語学部門、文学テキスト部門が、国内外からの著名な招待報告者を交えて開催し、大きな成果を挙げています。今回は、史料部門が組織し、「歴史テキストの生成：テキスト／コンテキスト」をテーマに、フランスから3名、米国から1名、国内の他大学から4名、同研究科から COE 推進担当者を中心に4名、計12名の若手及び学界の中心で活躍する研究者の参加を得て開催されました。

研究集会に先立って行われた開会式(町田 健同研究科教授の司会進行)では、神尾文学研究科長の開会の



あいさつする平野総長



あいさつする泉審議官

辞に続いて、平野総長及び泉紳一郎文部科学省大臣官房審議官から、研究集会の意義を講じるあいさつがありました。

国際研究集会では、初めに、史料部門の推進担当者である佐藤彰一同研究科教授から主旨説明があった後、第1部「古代世界におけるテキストとその社会的文脈」、第2部「テキスト生成とコンテキスト化の諸相：中世初期ヨーロッパ」、第3部「領主制のよりのテキスト生成」の3つのセッションに分け、休憩時間を含め計18時間にわたる熱のこもった報告と質疑応答が繰り広げられ、約150名の参加者は、人文科学の最先端の報告を熱心に聞き入っていました。これは、同時通訳の力に負うところが大きかったと思われます。

この研究集会は、欧米のこの種の研究集会の慣例にならない、予め論点を整理した質問表を送り、議論の柱を4点ほど立てていましたが、全ての報告がその幾点かに答える形で論が組み立てられており、欧米からの参加者もこうした研究水準の高い報告に驚いていました。報告と討議を通じて、テキストの生成におけるコンテキストのレベルを社会的なレベルと記号学的レベルの二つの層で考えなければならないこと、また、歴史記述とフィクションの間に差異はあるか、あるとすればそれは何かというテキスト研究で論争的になっている難問についての解答の糸口が見出されました。なお、近いうちに、日本語及び欧語のプロシーディングスを出版する予定です。



ラウンドテーブルで議論する報告者



泉文部科学省審議官が本学を訪問

- 国際研究集会出席後、21世紀 COE プログラム採択拠点の研究施設等を視察 -

泉紳一郎文部科学省大臣官房審議官は、9月16日（木）佐藤彰一文学研究科教授を拠点リーダーとする21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」の第4回国際研究集会（会場：野依記念学術交流館、11頁参照）に来賓として出席されたのを機に、本学の21世紀 COE プログラム採択拠点の研究施設などを訪問されました。

最初に、21世紀 COE プログラム「新世紀の食を担う植物バイオサイエンス」の拠点リーダーである水野 猛生命農学研究科教授の研究室を訪問し、水野教授から同プログラムの研究の進捗状況について、プロジェクターを用いて説明を受けた後、21世紀 COE プログラム「先端プラズマが拓くナノ情報デバイス」の拠点リーダーである菅井秀郎工学研究科教授の実験室（IB 電子情報館）で、同教授から研究内容の説明を受けました。

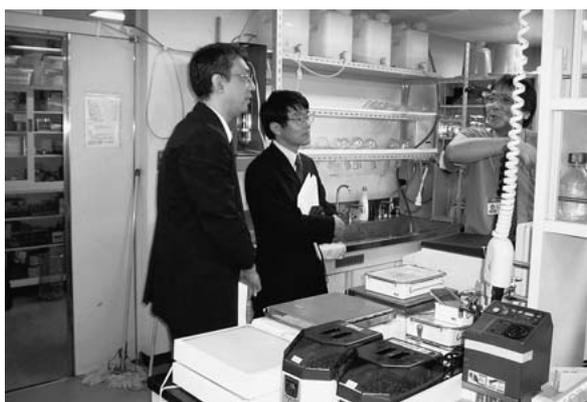
続いて、大学院法学研究科で、講義室、模擬法廷等を視察された後、鶴舞キャンパスにある医学部附属病院を訪問されました。附属病院では、杉浦医学系研究科長、井口医学部附属病院長から教育研究活動状況について、吉田遺伝子治療・再生医療センター長から同



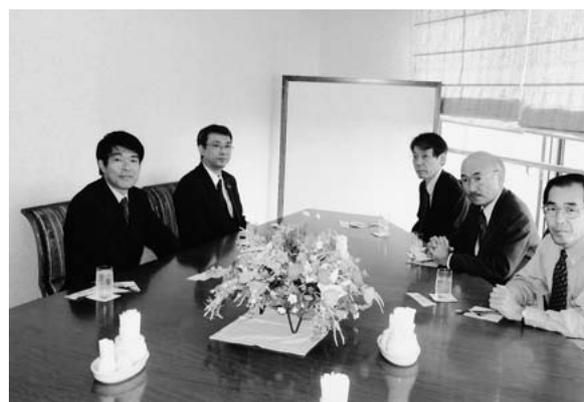
菅井工学研究科教授から説明を受ける泉審議官

センターでの研究活動について、また、同病院の現場を担当する中川副病院長（看護部長）から病棟の説明を受けました。

その後、21世紀 COE プログラム「同位体が拓く未来 - 同位体科学の基盤から応用まで - 」の拠点リーダーである山本一良工学研究科教授の研究室を訪れ説明を受けた後、国際研究集会の懇親会に出席され、本学を後にしました。



水野生命農学研究科教授から説明を受ける泉審議官



杉浦医学系研究科長、井口医学部附属病院長らと懇談する泉審議官



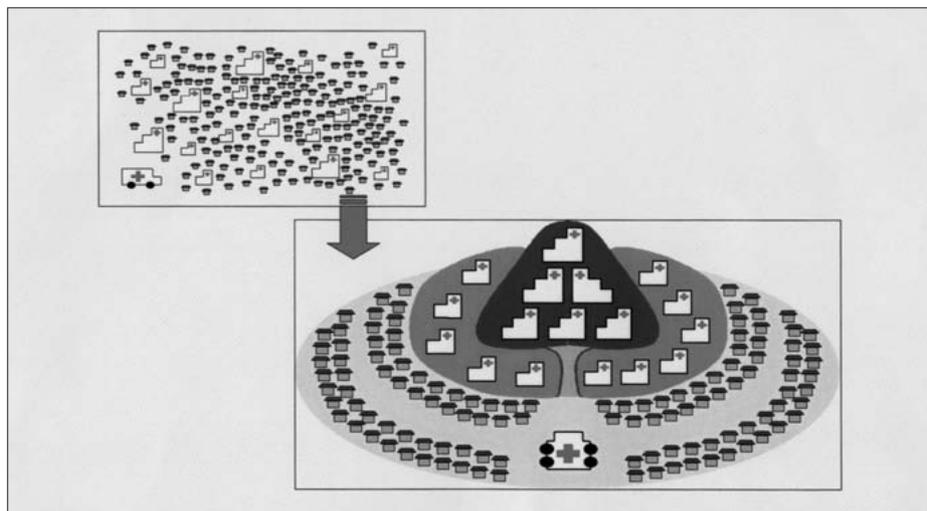
「東海医療情報ネットワークコンソーシアム」 設立式典及び設立記念シンポジウムが開催される

- いつでも、どこでも、誰でも最も適切な医療を安心して受けられる社会の実現を支援 -

「東海医療情報ネットワークコンソーシアム」設立式典及び設立記念シンポジウムが、9月11日(土)野依記念学術交流館において開催されました。

このコンソーシアムは、「いつでも、どこでも、誰でも最も適切な医療を安心して受けられる社会」の実現を支援するため、東海地区を中心とした情報技術(IT)関連企業、大学をはじめとするアカデミア、医療を実践する各種医療機関及び行政関係部門との連携を図り、医療の向上に向けた自由な意見交換の場を提供しようとするものです。コンソーシアム設立のきっかけは、吉田 純医学系研究科教授(脳神経外科学、同コンソーシアム会長に就任)が、地域貢献特別支援事業等の助成を受けながら進めてきた「愛知県脳卒中救急医療情報ネットワーク」確立事業にあり、この事業で培われてきたノウハウを基に、脳卒中医療情報ネットワークの実用化をはじめ、がん、心臓疾患等の様々な疾患を対象に医療のIT化を推進します。ワーキングプランとしては、新しい医療情報ネットワークの提案とその事業化支援、ヘルスケアネットワーク事業の確立支援等を挙げ、実施にあたっては、数名の実務委員が企業、アカ

デミア、医療機関の間の意見を調整しながらその方向性を示していきます。顧問には、平野真一名古屋大学総長、加藤延夫愛知医科大学理事長・学長、後藤 淳愛知工業大学理事長・総長、藤野明男愛知県医師会副会長、上田龍三名古屋市立大学医学部附属病院長、井口昭久名古屋大学医学部附属病院長にご就任いただき、強力なリーダーシップのもとで、東海地区における「医療の産業化」を支援する体制が整いました。企業会員として、KDDI株式会社、株式会社NTTドコモ東海、NTTコムウェア東海株式会社、株式会社エジックス、監査法人トーマツ、株式会社島津製作所、中京テレビ放送株式会社、中部電力株式会社、東海テレビ放送株式会社、西日本電信電話株式会社、丸紅株式会社が、また、医療機関会員として、JR東海総合病院、名古屋第二日赤病院、愛知厚生連海南病院等が参加しています。設立式典及び設立記念シンポジウムを契機に、企業会員及び医療機関会員が増えるなど、学内外の多くの方々とのさらなる協力が得られることが期待されています。



医療と情報技術の融合(疾患別IT統合病院)



エコトピア科学研究機構が 寄附研究部門の創設記念式典等を開催

エコトピア科学研究機構は、今年4月に設置したエネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門とキラル高分子工学(ダイセル)寄附研究部門の創設を記念して、8月31日(火)環境総合館レクチャーホールにおいて、学内外の関係者や教職員など多数出席のもと、記念式典を、また、グリーンサロン東山において記念祝賀会を開催しました。

エネルギーシステム寄附研究部門は、中部電力株式会社の寄附により創設され、電気エネルギーの最適化、環境調和型次世代電気機器・材料の実現、分散型エネルギー源の有効利用・効率向上、再生可能エネルギーをはじめとする多様なエネルギー源の有効活用の技術展開に基づき、ハード要素技術からシステム評価に至る広い視点から将来の最適なエネルギーシステムの構築を目指すとともに、研究活動を通じてエネルギー分野における指導的役割を果たす人材の育成を行うもので、平成8年4月より創設され、今回で3期目となります。

キラル高分子工学寄附研究部門は、今年4月よりダイセル化学工業株式会社の寄附により創設され、キラル高分子の合成のための手法、精密構造解析、機能評価とその応用に関する研究を推進するとともに、人材の育成も行われます。

式典では、松井機構長の式辞の後、平野総長から、「寄附研究部門の開設は、本学においてもエネルギーシステムの最適化技術及び材料研究を総合的に行う体制が整えられ、エコトピア科学研究機構が目指す最先端の研究が可能になることは大変意義が大きいと考えています。二



あいさつする平野総長

つの寄附研究部門が本学におきまして初期の目的を達成されますよう関係の方々のご活躍を期待しております。」とあいさつがありました。続いて、中部電力株式会社とダイセル化学工業株式会社に対する感謝の意を表し、感謝状と記念品が贈呈された後、中部電力株式会社常務取締役技術本部長の清水眞男氏とダイセル化学工業株式会社取締役常務執行役員の八浪哲二氏から祝辞が述べられました。その後、後藤益雄エネルギーシステム寄附研究部門教授と岡本佳男キラル高分子工学寄附研究部門教授から、それぞれの寄附研究部門の研究理念、目的、活動状況等について説明がありました。

祝賀会では、架谷昌信愛知工業大学教授(前理工学総合研究センター長・本学名誉教授)の祝辞に続き、澤木工学研究科長の発声で乾杯が行われ、参加者全員で寄附研究部門の創設を祝いました。最後に、松井機構長から謝辞が述べられ、祝賀会は盛況のうちに終了しました。



感謝状贈呈の様子



祝辞を述べる(左から)清水中部電力(株)常務取締役技術本部長、八浪ダイセル化学工業(株)取締役常務執行役員



祝！全日本大学駅伝に出場決定

- 3大会ぶり12回目の出場 -

第36回全日本大学駅伝対校選手権大会（11月7日（日）8時10分熱田神宮スタート～伊勢神宮ゴール）の東海地区選考会が、9月23日（木）、三好池トリムコースにおいて行われ、男子は、四日市大学に次ぐ2位となり、全日本大学駅伝への出場権を3大会ぶりに獲得しました。

選考会は、愛知、岐阜、三重、静岡から12校が参加して、1校が4人ずつ2チームに分かれて4区間51.6kmを走り、8人の合計タイムを競う形で行われ、

上位2チームに出場権が与えられます。1区から四日市大学が飛び出し、本学、中京大学、愛知工業大学の3校が2位争いをするという展開で、最終区までもつれましたが、本学はアンカー勝負を制し、Bチームが5位、Aチームが6位となり、総合で2位に入りました。

陸上競技部の本大会での健闘と、皆さんの応援を期待しています!!

< 総合結果 >

順位	大学名	総合タイム
1	四日市大学	5'32'03"
2	名古屋大学	5'38'28"
3	愛知工業大学	5'38'56"
4	中京大学	5'39'17"
5	名古屋商科大学	5'45'36"
6	大同工業大学	5'49'46"
7	名城大学	5'53'11"
8	静岡大学	5'54'01"
9	中京学院大学	5'57'12"
10	愛知教育大学	6'01'35"
11	愛知大学	6'02'53"
12	三重大学	6'24'12"

順位	51.6km	第1区 8.6km	第2区 12.9km	第3区 12.9km	第4区 17.2km
5	名古屋大学 B 2'49'09"	渡辺 伸元 (医・医5) 28'01" 5 28'01"[5]	藤永 紘基 (工1) 42'33" 9 1'10'34"[7]	木村 孝貴 (工1) 43'04" 8 1'53'38"[6]	内藤 聖貴 (理D1) 55'31" 3 2'49'09"[5]
6	名古屋大学 A 2'49'19"	本田 将浩 (経2) 28'26" 9 28'26"[9]	伊藤 潤一 (農M1) 41'21" 2 1'09'47"[3]	稲垣真太郎 (情M1) 43'35" 11 1'53'22"[4]	中村 高洋 (工3) 55'57" 5 2'49'19"[6]



愛知工業大学と競り合う内藤選手



中京大学と最後の競り合いをする内藤・中村両選手



乾燥地を中心とした人類文明史像の再構築

- アフリカのサハラ南縁地域研究からの提案 -

嶋田 義仁

原野のなかのコスモポリタン都市と牧畜民

サハラ砂漠の南の、サーヘル・スーダン地帯と呼ばれるアフリカの乾燥・半乾燥地帯に通いだして25年。その間わたしが驚きをもって注目してきたのは、牧畜文化の豊かさとこれに支えられた乾燥地の文明度の高さである。

わたしが最初に足を踏み入れたのは、レイ・ブーバという伝統イスラーム王国で、カメルーンという国の最辺境地帯に位置する原野の中の王国であった。しかし人口5万の王国には20もの部族が含まれていた。人口2,500人の王都にも、同じ数だけの部族がいた。部族が角逐しあっているかみえるアフリカにも、多部族宥和の世界が存在していたのである。その様には王朝風の優雅ささえあった。わたしはこの王国に、『中央スーダンのコスモポリタン都市』という仏文学位論文とともに『優雅なアフリカ』という著書を献じた。

原野の中にこのような超多部族の王国を生み出したのは、「フルベ族の聖戦」と呼ばれるイスラーム国家建設運動であった。フルベ族はウシ牧畜民であったが、18-19世紀イスラームを奉じて立ち上がり、西アフリカ内陸部一帯を席卷する一大国家建設運動をひきおこした。レイ・ブーバ王国はその残存王国のひとつであった。

何故に、牧畜民はしばしば大規模国家形成をなし得るのか。王国で暮らすなかで私が気付いたのは、牧畜がきわめて高い商品生産能力を有することだった。家畜は脚があるため、他の運搬手段なくとも商品化できるからであ

る。運搬手段が欠如した原野で、農産物の商品価値は無に等しかった。ウシー頭でかつては奴隷一人が買えた。自動車など近代的運搬手段が存在する現在でも、ウシー頭の価値は、農耕民の一年間の農業生産の価値に相当した。サハラに張り巡らされた交易網

家畜はさらに他の商品の運搬手段にもなり得た。

サハラとその周辺では特にラクダが大活躍する。ラクダのおかげで広大なサハラ砂漠には長距離交易網がはりめぐらされた。サハラ砂漠一帯には10世紀以来数々の交易都市が成立し、サハラ砂漠の南の黒人世界もイスラーム商業経済の波に飲み込まれた。この刺激をうけて大規模な国家形成もはじまった。私は、サハラ交易で栄えたトンプクトゥ、ジェンネといった伝統イスラーム交易都市の調査にも着手し、サハラ砂漠中に分布する真珠のように美しいオアシス都市も訪ね歩いた。

砂漠と言うと不毛の世界のように思われがちであるが、そこには湿潤な森の農耕文明の住人にはわからない豊かさがあった。それは様々な土地の産物や人々を結びつけ交流させる豊かさである。乾燥地では人は孤立して生きられない。土地土地で産するわずかな産物を分かち合いながら人々は生きている。それが実は大きな富を産む。その中心にいたのが牧畜民である。牧畜民は原野の盗賊のようにみなされてきたが、現実の牧畜民は巨大な富を所有し、また富の流通にも長けた洗練された人びとであった。そして、イスラームもそのような砂漠の生活の知恵に支えられ

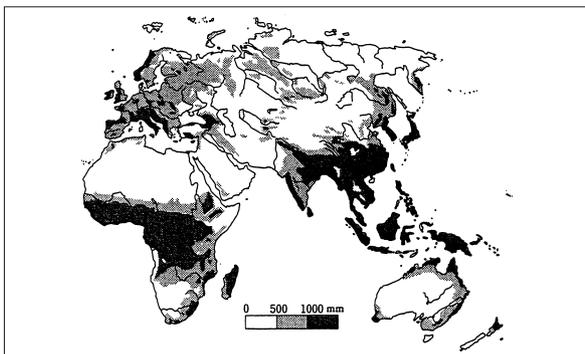


図1 アフロ・マラーシア大陸における乾燥地の分布

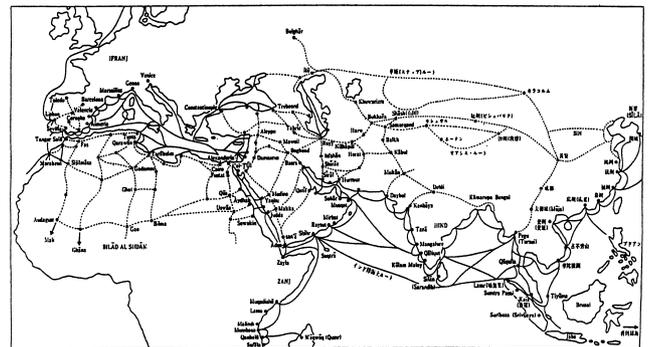


図2 イスラーム初期の交易ルート



レイ・ブーバ王国の王宮

て成立した宗教であるとわたしは理解するようになった。排他的で闘争的なのは、むしろ、森を開墾して得た田畑を占有し、土地に執着する生活を営んできた湿潤農耕文明のメンタリティーであった。「自己利益」、「個人主義」、「自助」といった近代主義を支えた価値は、森の文化の産物であり、そこには根源的な排他主義が横たわっている。乾燥地文明を破壊した近代システム

このような乾燥地文明の視点に立つと、近代史の歪みがよくわかる。

内陸乾燥地帯の視点からみると、大航海時代とともに始まる近代は、「海」を中心に世界の物流体系が再編成された時代である。その中心になったのは、森の文明の中に育った西洋である。西洋は、森から切り出した木材で船を建造し、大西洋などの海洋航路を開発し、世界を制覇した。それは世界を裏返すような企てだった。内陸の物流体系は世界の中心から辺境へと追いやられるに留まらず、破壊されつくされた。しかもこの「海」の文明はおおらかに人と物を流通させる代わりに、人と土地の占有に執着した。そして今また、東西冷戦構造の崩壊を機に、かつての内陸物流体系がよみがえりはじめているが、そこには、近代の「占有」の論理があいかわらず見え隠れしている。それが、乾燥地帯の紛争の究極因のようにみえるのである。この排他的な「占有」の思想への反省なくして、地獄絵さながらの乾燥地の紛争問題は解決し得ないであろう。



サハラのおアシス都市

国際共同研究

こうしたビジョンのもと、今、乾燥地を中心とした人類文明史像の再構築を目的とした国際共同研究の準備にとりかかっている。この基礎固めとしてこれまで、アフリカ伝統王国をめぐる科学研究費による二つの国際共同研究（平成10-11、14-16）を組織し、欧文論文を中心とした African Kingdoms Collection 4 巻などを発刊してきた。これまで私をはじめ日本人研究者たちはアフリカで地道なフィールド・ワークを繰り返してきたが、その成果が問われはじめているのである。



フルベ族とウシの群れ

プロフィール

しまだ よしひと

名古屋大学大学院文学研究科教授（比較人文学講座）

昭和24年山梨県生まれ。京都大学文学部・文学研究科で宗教学を専攻。同博士（文学）。フランスの社会科学高等研究院（E.H.E.S.S.）で民族学を専攻。同博士（民族学）。

西洋宗教哲学が研究の出発点。しかし西洋思想を相対化する視点を求めて神話学や民俗学、アフリカ民族学へと越境。研究の柱は三本。アフリカを中心とする乾燥地とイスラーム文化の研究、日本神話、稲作文化研究、人類学、宗教学をふくめた西洋思想の研究。さまざまな分野を涉猟してきたが、多くの賞をいただき励まされてきたことに感謝している（受賞：澁澤賞1986、NIRA 政策研究・東畑賞1998、和辻哲郎文化賞1999、沙漠学会論文賞2001）。

主な著書：『異次元交換の政治人類学』勁草書房（1993）、『牧畜イスラーム国家の人類学』世界思想社（1995）、『稲作文化の世界観』平凡社（1998）、『優雅なアフリカ』明石書店（1998）、『アフリカの都市の世界』（共編著）世界思想社（2001）、編集：African Kingdoms Collection 4 巻（2004）、訳書：ルギラ『アフリカの宗教』青土社（2004）。





大学院情報科学研究科が公開セミナーを開催

- 機械と人間の情報科学 -

大学院情報科学研究科は、8月28日(土)、IB電子情報館において、情報文化学部及び工学部電気電子・情報工学科の共催を得て、「機械と人間の情報科学」をテーマに、公開セミナーを開催しました。

この公開セミナーは、平成15年4月の大学院情報科学研究科の設立以来、最初の一般向けセミナーとして、同研究科を広く知ってもらうことを目的として開催されたもので、当日は50名を超える高校生、大学生、一般の方々の参加がありました。今回は、情報科学が情報に関わる総合的な学問であることを印象付けるために、「機械と人間の情報科学」をテーマに掲げ、ポスター展示と2件の講演を行いました。

セミナーでは、ポスター展示が同館中棟ピロティールにおいて行われ、同研究科の各研究室から、「確率論とその応用：株価モデルについて」、「仮想化人体に基づく診断・治療支援システム」、「AT:相互に通信可能な個人用知的移動体」、「シミュレーションで自然の世界を探る」、「雑談のできるコンピュータ - KELDIC (Ken's Lab. Dialogue Computer) - 」、「ユビキタス環境下での高等教育機関向けコース管理システム」等



ポスター展示の様子

の34件の展示がありました。また、同館東棟大講義室では、高田広章同研究科教授(情報システム学専攻)による「自動車の中で活躍する情報科学」、齋藤洋典同研究科教授(メディア科学専攻)による「ココロとカラダをむすぶ情報科学」と題する講演が行われ、参加者は熱心に聴講していました。

当日実施した受講者へのアンケートでは、「内容がわかりやすかった」、「教養を身につける機会として興味深かった」などの好意的な意見や、「ポスター展示には説明員がいたほうがよかった」、「中学、高校にもっとアピールしたほうがよかった」といった次回以降への期待を込めた貴重な意見が多数寄せられました。

なお、この公開セミナーは、今後、毎年度開催する予定です。



講演する高田情報科学研究科教授



講演する齋藤情報科学研究科教授



オープンカレッジ 「自由奔放！サイエンス」が開催される

大学院経済学研究科エクステンション・サービスは、オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」を開講し、第1回講義が9月11日(土) 文系総合館カンファレンスホールにおいて行われました。

オープンカレッジは、大学を目指す人たちに、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意をできるだけわかりやすく伝えるために、昨年度に引き続き開講されたもので、「自由奔放！サイエンス」という総合テーマの下に、本学の様々な専門分野の教員が、中学生、高校生にもわかる言葉で最新の研究について講義を行います。

今年度は、来年3月までに10回の講義を下記のとおり予定しており、第1回は、末松良一工学研究科教授が、「からくり人形に学ぶ ホームロボットの進むべき道」をテーマに講義をしました。末松教授は、日本人特有のロボット観を育んだ江戸からくりについて、まず、その発祥と普及について説明しました。続いて、

代表的なからくり人形、今なお各地で催されている山車からくり祭を紹介し、からくり人形の特徴、モノづくり技術との関連などについて話をした後、人とロボットの関係のあり方、ホームロボットの進むべき道について、参加者と意見交換を行いました。

講義日程

- 9月11日 「からくり人形に学ぶ ホームロボットの進むべき道」
末松良一工学研究科教授
- 9月25日 「愛と変身の物語 - ヨーロッパ絵画でギリシャ神話を読む」
木俣元一文学研究科教授
- 10月16日 「物理学の役立て方とX線で探る宇宙」
田原 謙エコトピア科学研究機構教授
- 11月16日 「心は理系か文系か」
齋藤洋典情報科学研究科教授
- 11月20日 「森と環境問題」
竹中千里生命農学研究科教授
- 12月18日 「法の役割と専門職」
濱田道代法学研究科教授
- 1月8日 「癌の分子生物学」
濱口道成医学系研究科教授
- 1月22日 「知識の視覚化 - 教科書の生まれた時代」
松下晴彦教育発達科学研究科教授
- 2月5日 「過去の太陽活動と気候変動」
増田公明太陽地球環境研究所助教授
- 3月5日 「日本の金融機関はどうなるのか？」
家森信善経済学研究科教授



講義をする末松工学研究科教授



大学院環境学研究科が 創設後初めての外部評価委員会を開催

大学院環境学研究科は、9月9日(木)、15日(水)、16日(木)、環境総合館講義室及びレクチャーホールにおいて、創設後初めての外部評価委員会を開催しました。

同研究科は、人類が直面する環境問題の解決に理学、工学、人文・社会科学の総力を結集して取り組むことにより、地球環境の維持・改善と人類社会の持続的発展に貢献する新しい知の体系としての「環境学」を創造することを目的として、平成13年4月に設置されました。

平成16年4月で設立後3年を経過するにあたり、下記の学外有識者10名からなる外部評価委員会を開催し、この間の教育研究活動の現状及び将来計画について、各評価委員から貴重な意見及び将来に向かっての助言がありました。

今後の同研究科のさらなる発展に反映させるため、各評価委員からの意見等を取りまとめ、平成17年2月を目途に外部評価報告書を作成し関係者に配付する予定です。

外部評価委員会委員(10名)

[全体評価委員]

浅野 直人 福岡大学法学部教授(委員長)

石井 紫郎 独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター副所長

清水 哲太 トヨタホーム株式会社代表取締役会長

西岡 秀三 独立行政法人国立環境研究所理事

前田 弘司 中日新聞名古屋本社論説委員

[地球環境科学専攻評価委員]

廣田 勇 社団法人日本気象学会理事長

深尾 良夫 独立行政法人海洋研究開発機構 地球内部変動研究センター長

[都市環境学専攻評価委員]

内田 祥哉 東京大学名誉教授

安井 至 国際連合大学副学長

[社会環境学専攻評価委員]

浅野 直人 福岡大学法学部教授(全体評価委員を兼ねる)

塩原 勉 甲南女子大学学長



外部評価委員会の様子





医療安全講演会が開催される

医学部附属病院医療安全管理室は、9月27日(月)講師に稲垣克巳氏を招き、「医療の安全を願って - 医療事故被害者家族の願い - 」と題して医療安全講演会を開催しました。

この講演会は、医療の安全と質の向上を目的に、毎年全職員を対象に開催されているもので、例年、国内外の医療安全管理の専門家を招いて、その取り組み・手法を主なテーマとしていましたが、今回は初めての試みとして、医療事故被害者のご家族を講師に招きました。講師の稲垣氏は、ご長男が昭和58年に同院での医療事故で重度の障害を負われ、現在まで21年間にわたり、自宅でご家族とともに介護にあたっておられます。十分な説明責任を果たさず、謝罪もなかった同院に対して提訴され、平成11年には同院の敗訴が決定しました。また、ご長男の事故及びその後の医療裁判の経緯を綴った「克彦の青春を返して - 医療過誤18年の闘い」(中日新聞社平成13年発行)などの著書があり、現在は、厚生労働省の医療安全対策研究班の患者代表の委員としても活躍されています。



講演する稲垣氏

講演で、稲垣氏は、医療事故被害者と医療側がともに医療事故防止のために取り組む姿勢を提案し、「事故を隠さないこと」、事故を認め謝罪するとともに事故原因を究明し再発防止策を講じることが最も重要であると話しました。また、現状の医療の問題点にも触れ、医療改革についても言及しました。なお、この講演会は、今年5月に同院が稲垣ご夫妻に謝意した際に計画

されたもので、広く院内に案内しており、当日は各職種の職員のほか、学生や一般の方々など、約180名の参加がありました。さらに、医療事故被害者が当該病院で講演するという点にマスメディアも注目し、講演の取材のほか、講演後には一般の参加者、医師、学生等に対しても取材があるなど、医療安全に対する関心の高さが感じられました。



熱心に聴講する参加者



博物館

「戦前の脳外科手術フィルム」の寄贈に 対して武田薬品工業に感謝状を贈呈

博物館は、9月2日(木)、戦前の脳外科手術フィルムの寄贈に対して、武田薬品工業に感謝状を贈呈しました。

このフィルムは、日本の脳外科・脳神経外科学の開拓者である齋藤 眞名古屋大学教授(1889～1950年)が64年前、教育用に脳腫瘍の摘出手術を記録した16ミリフィルムで、武田薬品工業旧本社の資料室から最近発見されたものです。

感謝状贈呈式では、武田薬品工業名古屋支店長の崎山 寛氏から足立博物館長と吉田 純医学系研究科教授(脳神経外科学)にオリジナルフィルムが寄贈されました。博物館は、当時の医療水準の高さを知る貴重なフィルムを寄贈していただいたことに対して、感謝の意を表し、武田薬品工業に感謝状と記念品を贈呈しました。

博物館では、フィルムの内容をDVDに保存し、10月6日から8日まで名古屋国際会議場で開催される「第63回日本脳神経外科学会総会」で上映し、その後、10月13日から11月12日まで開催される第4回企画展「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞」で映像の一部を一般公開する予定です。



64年前の脳外科手術フィルムを
手にする吉田医学系研究科教授



感謝状贈呈式の様子



大学院生命農学研究科

農業ふれあい教室を開催中 - お米を科学する -

大学院生命農学研究科は、附属農場において、「お米を科学する」をテーマに、農業ふれあい教室を開催しています。

この教室は、文部科学省による地域貢献特別支援事業の一環として、平成13年度から毎年開催されているもので、今年度は、イネの種まきから収穫に至る作業の中で、自然に親しみ、作物を育てる楽しさを体験することを目的として、6回の教室を開催します。また、一般に行われているイネ作りとは異なり、作業を通じてイネの一生を科学的に観察しながら、植物についての知識を深めることに重点が置かれています。イネ作りは、各家族に与えられた2メートル×7メートルの面積の水田を生徒と保護者に分けて、どちらがうまくできるかを競い合う形で行われています。

この教室には、小学校2年生から中学校2年生までの生徒とその保護者総勢28名が参加し、既に、種まき(第1回:5月8日)、田植え(第2回:6月12日)、除草・肥培管理(第3回:7月24日)、出穂・イネの花の観察と虫(害虫)の生態観察(第4回:8月21日)、稲刈り(第5回:10月16日)が行われました。

なお、第6回の教室「新米試食会」は、11月6日(土)に予定されています。



田植えをする参加者



附属農場

平成16年度農業教育公園・ 講演会の第1回を開催 - 地球を支える土の微生物 -

大学院生命農学研究科附属農場は、平成16年度農業教育公園・講演会の第1回として、9月4日(土)、木村真人生命農学研究科教授による「地球を支える土の微生物」と題する講演会を開催しました。

この講演会は、文部科学省の地域貢献特別支援事業により、附属農場に併設された農業教育公園内の農業館を利用して、昨年度から開催されているもので、今年度は、4回の講演会を予定しています。

講演会では、木村教授から、「緑の地球を維持するためには土の中の微生物が必須であり、植物は呼吸と炭酸ガス同化を繰り返し、植物体を成長させています。もし土の中の微生物が突然いなくなったら、植物体の遺物は分解されず、10数年ほどで大気中の炭酸ガスは利用されつくしてしまい、緑の地球は褐色の枯れ木、枯れ草で覆われることになります。また、大気中の炭酸ガスがなくなると気温も急速に低下し、我が国も広く氷河に覆われると予想されます。緑の地球は様々な植物の生育によってもたらされていますが、地球上の植物が生き続けるのを保障しているのは土の中の微生物の働きによるものです。」と説明がありました。参加者は、木村教授の講演で、土の中の微生物の存在の重要性について、認識を新たにしていました。



講演する木村生命農学研究科教授



農学国際教育協力研究センター

2004年度第5回オープンセミナーを開催 - オープンセミナー初の学外開催 -

農学国際教育協力研究センターは、9月16日(木)、17日(金)の両日、ミシガン州立大学社会学部の山口富子氏を講師として招き、「遺伝子組み換え作物の社会的受容インドにおけるBtワタに関する論争」をテーマに、2004年度第5回オープンセミナーをつくば市及び東京都と共同で開催しました。今回は、講師の山口氏が行ったインドにおけるフィールド調査の分析結果及びそれに基づく施策提案が内容であることから、政策・施策担当者が多いつくば市、東京都で開催されました。

同センターのオープンセミナーとしては初めての学外開催でしたが、(独)農業生物資源研究所、(独)食品総合研究所、(独)環境研究所(以上、つくば約50名)、農林水産政策研究所、(財)バイオインダストリー協会、(社)農林水産先端技術産業振興センター、NPOくらしとバイオプラザ21(以上、東京約25名)等、政策立案・安全性評価・普及広報に携わる専門家が多数参加し、活発な意見交換が行われ、特に、我が国において、遺伝子組み換え作物をどのように普及させるかという点に関して、サイエンスコミュニケーション等の技法を取り入れた、対象別の情報公開が必要であるという意見が多く出されました。



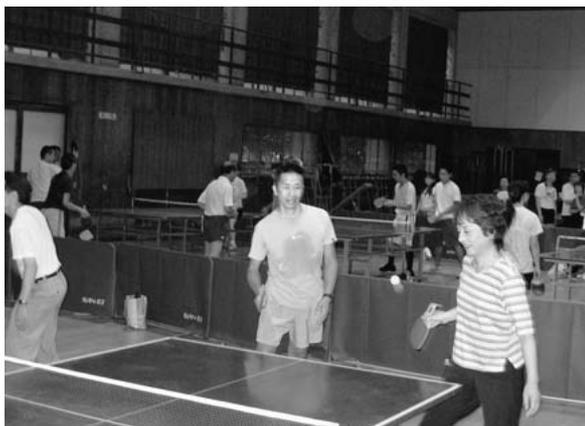
平成16年度職員体育大会が開催される

職員の健全な体育等の活動を通じて元気を回復し、職員相互の緊密度を高めることにより、勤務能率の発揮及び増進に資することを目的として毎年開催されている体育大会が、今年度も開催されました。

今年度は、8月26日(木)の勤務時間外に、11チーム参加によるピンポン大会を、8月31日(火)、9月1日(水)には、同じく勤務時間外に、8チーム参加による硬式テニス大会を実施し、各競技とも、優勝を目指して白熱した好ゲームが繰り広げられました。

なお、大会の成績結果は下記のとおりです。

種目	順位	チーム名
ピンポン	優勝	技人座
	準優勝	チームあやや
	第3位	SCIT2
	第4位	ぐっち-ず
硬式テニス	優勝	プラズマ&NTC
	準優勝	ウォンバツ
	第3位	山の上庭球倶楽部
	第4位	CADS



ピンポンの試合の様子

新任部局長等の紹介



大学院文学研究科長・文学部長
杉山 寛行
(すぎやま ひろゆき)
昭和23年3月30日生

プロフィール
学位：文学修士(名古屋大学)
専門分野：中国文学、中国思想史学

略歴
昭和55年4月 名古屋大学講師(文学部)
平成3年4月 名古屋大学助教授(文学部)
平成9年2月 名古屋大学教授(文学部)
平成12年4月 名古屋大学教授(大学院文学研究科)
平成16年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長(～H16.10.31)
平成16年11月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長(～H18.10.31)



国際学術コンソーシアム推進室長
早川 操
(はやかわ みさお)
昭和27年3月6日生

プロフィール
学位：Ph.D.(コロンビア大学)、教育学修士(名古屋大学)
専門分野：教育哲学

略歴
昭和57年4月 市邨学園短期大学講師
昭和60年4月 市邨学園短期大学助教授
昭和62年4月 名古屋大学助教授(教育学部)
平成10年4月 名古屋大学教授(教育学部)
平成12年4月 名古屋大学教授(大学院教育発達科学研究科)
平成16年4月 名古屋大学総長補佐(国際連携担当)(～H17.3.31)
平成16年9月 名古屋大学国際学術コンソーシアム推進室長(～H18.8.31)



名大を表敬訪問された方々

平成16年7月～9月

7.1 CERI（教育研究革新センター）顧問 / OECD（経済協力開発機構）前参事官

Jarl Bengtsson CERI（教育研究革新センター）顧問 / OECD（経済協力開発機構）前参事官が来学され、学術振興促進等について懇談を行いました。

同氏は、文部科学大臣表彰を受賞のため来日され、OECD 在職時の研究（自動車メーカーの人材養成に関する研究）の関係から、トヨタ自動車と本学を訪問されたものです。

7.28 木浦大学校人文科学大学日語日文学科教授及び夏季日本語講習学生

李 炯宰木浦大学校（韓国）人文科学大学日語日文学科教授（引率）及び今年度夏季集中日本語講座に参加の同大学校学生2名が平野総長を表敬訪問され、同大学との学生交流の現状と今後の交流促進について懇談を行いました。

7.29 ダッカ大学学長

Syed Mohammad Abul Faiz ダッカ大学（バングラデシュ）学長ご夫妻が来学され、本学との学術交流推進について意見交換を行いました。

同学長は、平成16年度国際交流基金文化人短期招へい事業の一環で来日されたのを機に、本学を訪問されたものです。

9.15 ペンシルベニア大学副医学部長

Neal Nathanson ペンシルベニア大学（アメリカ）副医学部長が来学され、平野総長らと国際学術コンソーシアム（AC21）及び大学間交流協定の締結等について意見交換を行いました。



9.27 AAACU（アジア農科系大学連合）会長等

Pongsak Angkasith チェンマイ大学（タイ）副学長（AAACU 会長）、Shy-Hwa Cheng 国立中興大学（台湾）農業及び自然資源学部長（同副会長）及び Pedro D. Destura 東フィリピン大学（フィリピン）学長（同理事）が、平野総長を表敬訪問され、学術交流推進等について懇談を行いました。

AAACU（アジア農科系大学連合）隔年会議が当日から本学で開催され、本学の会場提供及び同会議への協力に対するお礼も兼ねて訪問されたものです。





理 学 館



理学館南西外観

キャンパスクローズアップ第1回（本誌 No .135号）で紹介した野依記念物質科学研究館の西側に隣接して、平成16年11月、理学館が完成しました。

本学では、学術憲章に掲げる研究及び教育目標を達成するために、既存の組織の枠を超えた汎用性及び流動性を有する施設、また、大学院生の教育環境等の改善、増加するプロジェクト研究に対応するため、学内共用施設等を複合した総合研究棟の整備を推進しており、理学館は、主に、大学院理学研究科・物質理学系領域の研究拠点として整備しました。

この建物は、地上7階・地下1階建て、延べ面積は7,130㎡です。地下1階から2階までは、大型機器等を使用した実験・研究スペース（核磁気共鳴装置等を設置）プロジェクト研究室、オープンラボを設け、3階から7階までは物質理学（物理系）の実験・研究のフロアとなっています。建物の外壁南面は、野依記念物質科学研究館と同じFRP（ガラス繊維強化プラスチック）製グレーティングによるダブルスキン（2重壁）にし、日射による環境負荷を低減させるとともに実験機器などの配管スペースとしています。将来、増築予定の建物とのオープンスペース（テクニカルスリット）に面する北面には、実験室からの排気ダクト等を集中して配管しています。

内部は、基本的に廊下をはさんで北側（テクニカルスリット側）に実験室を、南側に研究室等の執務室を配置し



外壁北面実験排気ダクト



外壁南面 FRP 製グレーチング

ています。また、廊下との間仕切りにはガラススクリーンを採用し、廊下への採光を確保することで、オープンで明るい雰囲気の実験・研究スペースとなっています。

理学館は、今回完成した建物の北側に、将来増築を予定しており、この建物が完成すると、延べ面積は合計で約13,000㎡となります。今回は増築部分を含めた全体のコアとなる部分までを整備しています。コアには、階段、エレベーター、リフレッシュコーナー、トイレなどの共用部分があります。

また、2階レベルでは、隣接する野依記念物質科学研究館との間を、十字型の歩行デッキで接続しており、両建物間の往来に配慮しています。また、増築建物完成時には、歩行デッキが既設の理学部ゾーンから理科系食堂などの福利ゾーンへの通路となるように計画しています。

(施設管理部)



800MHz 核磁気共鳴装置



東山キャンパス



イベントカレンダー

開催月日	イベント・概要
9.11～3.5	<p>オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」</p> <p>目的：高校生に、出来るだけわかりやすく、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意を伝えること</p> <p>場所：文系総合館カンファレンスホール</p> <p>時間：10時～12時</p> <p>対象：高校生、社会人</p> <p>回数：10回（いずれも土曜日）</p> <p>http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/</p> <p>連絡先：大学院経済学研究科エクステンション・サービス 052-788-6197</p>
10.13～11.12	<p>第4回名古屋大学博物館企画展</p>  <p>テーマ：日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞</p> <p>場所：博物館展示室</p> <p>開館時間：10時～16時</p> <p>休館日：月・火曜日 ただし祝休日は開館</p> <p>入場料：無料</p> <p>連絡先：博物館事務局 052-789-5767</p>
10.29～11.12	<p>附属図書館2004年秋季特別展</p>  <p>テーマ：川とともに生きてきた - 東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術 -</p> <p>場所：附属図書館（中央図書館）展示室</p> <p>時間：10時～17時</p> <p>入場料：無料</p> <p>連絡先：附属図書館情報管理課庶務掛 052-789-3667</p>
11.6	<p>附属図書館2004年秋季特別展・古文書講座</p> <p>場所：附属図書館（中央図書館）多目的室</p> <p>時間：13時～15時</p> <p>内容：特別展担当教員による展示史料の解説</p> <p>入場料：無料</p> <p>連絡先：附属図書館情報管理課庶務掛 052-789-3667</p>

開催月日	イ ベ ン ト ・ 概 要
11.12	<p>環境医学研究所生体情報計測・解析（スズケン）寄附研究部門創設記念式典・講演会・祝賀会</p> <p>場 所：グリーンサロン東山 時 間：15時～</p> <p>プログラム ・15時～ 創設記念式典 ・15時30分～ 創設記念講演会 ・16時30分～ 創設記念祝賀会</p> <p>連 絡 先：環境医学研究所庶務掛 052 - 789 - 3886</p>
11.13	<p>まちとすまいの集い / 2004</p>  <p>主 催：大学院環境学研究科都市環境学専攻建築学系 場 所：環境総合館レクチャーホール 時 間：14時～17時</p> <p>内 容：（これに先立ち、12時～14時オープンラボを開催 環境シミュレーションスタジオ、災害対策室、1階ホールでの模型展示） 建築は、ひと、もの、自然との大きな関わりの中で成立します。単体としての建築から、地球環境、社会環境を見据えた、環境の中の、環境としての建築を考える必要があります。全国に例を見ない新しい組織である理工文連携の大学院環境学研究科の一員として、市民の方々とともに、ひと - もの - 自然、環境の中の、環境としての建築を語りしたいと思います。</p> <p>プログラム ・14時～15時30分 第一部 基調講演 ・15時45分～17時 第二部 パネルディスカッション「地球環境時代、これからの建築を語る」</p> <p>連 絡 先：有賀隆環境学研究科助教授 052 - 789 - 3750</p>
11.16	<p>第4回名古屋ビジネスセミナー</p>  <p>場 所：シンポジオンホール 時 間：15時～17時 講 演 者：水谷研治中京大学大学院教授 講演内容：日本経済と東海地域の展望</p> <p>連 絡 先：大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センター事務局 052 - 789 - 4941</p>
11.20	<p>農業教育公園・講演会 第3回</p> <p>場 所：大学院生命農学研究科附属農場・農業館 時 間：14時～16時 講 師：道家紀志生命農学研究科教授 演 題：植物と病原菌のミクロな知恵くらべ - 作物の耐病性強化に活かす -</p> <p>連 絡 先：大学院生命農学研究科附属農場 0561 - 37 - 0200</p>

開催月日

イ ベ ン ト ・ 概 要

11 24 第7回先端技術共同研究センター・オープンフォーラム



テ – マ : ITS 技術とヒューマン指向な車載情報処理システムの最新動向
 場 所 : IB 電子情報館大講義室 (中棟 2 階)
 時 間 : 13時～17時
 内 容 : 「ITS 開発におけるヒューマンインターフェース技術の現状～人に優しいクルマを目指して～」金森 等エコトピア科学研究機構・先端技術共同研究センター客員教授 (トヨタ自動車(株)車両技術本部第一車両技術部人間工学機能主査)
 「画像処理を利用した走行支援システム」谷本正幸工学研究科教授
 「車内音声インタフェースの高度化に向けて」武田一哉情報科学研究科教授
 「連続/離散ハイブリッドシステムモデルに基づくヒトの運転行動解析」鈴木達也工学研究科助教
 「ハイブリッド電気自動車のエネルギー管理システムのための走行パターン予測手法」道木慎二工学研究科助教

参加費 : 無料
 連絡先 : 岩田聡エコトピア科学研究機構教授 052 - 789 - 3303

11 25 第1回高等研究院フォーラム

テ – マ : ライフサイエンスの10年後のフロンティアを目指して
 場 所 : 野依記念学术交流館カンファレンスホール
 時 間 : 10時～
 連絡先 : 研究支援課高等研究院掛 052 - 788 - 6051

11 26～11 27 平成16年度情報処理教育研究集会 - 高等教育の質的転換を目指して -

場 所 : 豊田講堂 (11月26日) IB 電子情報館・工学部 7 号館 (11月27日)
 プログラム
 [11月26日]
 ・ 13時～17時30分 総長あいさつ・基調講演・パネルディスカッション
 ・ 18時～20時 懇親会
 [11月27日]
 ・ 9 時30分～12時 特別講演・分科会発表
 ・ 13時～17時30分 分科会
 連絡先 : 片山正昭エコトピア科学研究機構教授 052 - 789 - 2743

11 27 秋の野外実習「ドングリのサイエンス」

場 所 : 博物館野外観察園
 時 間 : 9 時～16時
 対 象 : 小学 5 年生～高校生
 定 員 : 20名 (11月 5 日まで募集)
 連絡先 : 博物館事務局 052 - 789 - 5767

11 28 第41回須賀杯争奪駅伝競走大会

内 容 : 豊田高専学生会と名古屋大学体育会の対抗駅伝 (豊田高専～名古屋大学)
 10時 豊田高専スタート
 13時30分 閉会式 (豊田講堂前庭)
 連絡先 : 学務部学務企画課 052 - 789 - 2164

12 .11 農業教育公園・講演会 第4回

場 所 : 大学院生命農学研究科附属農場・農業館
 時 間 : 14時～16時
 講 師 : 山内章生命農学研究科教授
 演 題 : 私たちの暮らしや食べ物と海外の農業
 連絡先 : 大学院生命農学研究科附属農場 0561 - 37-0200

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年9月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	日本の梅雨は多雨と小雨が交互に訪れる二年周期の傾向 海洋研究開発機構と安成哲三・地球水循環研究センター教授ら発表	9 .1(水)	中日(朝刊) 読売
2	学ぶはぐくむ:「IDE大学セミナー」シンポジオンで開催	9 .1(水)	読売
3	医学部附属病院で研修を受けていたイラク人医師ムハマト・ハッサンさん31日に帰国	9 .1(水)	毎日(朝刊) 朝日(朝刊)
4	水害対策は情報チェックから 辻本哲郎・工学研究科教授	9 .1(水)	朝日(夕刊)
5	21世紀COEプログラム「総合テキスト科学の構築」第4回国際研究集会「歴史テキストの生成:テキスト/コンテキスト」16日、17日開催	9 .1(水) 9 .8(水) 9 .9(木)	朝日(夕刊) 読売 中日(朝刊)
6	丸文が堀勝・工学研究科教授らと共同でプラズマ化学気相成長装置開発	9 .2(木)	日刊工業
7	浅間山噴火 藤井直之・環境学研究科教授コメント「活動続く可能性ある」	9 .2(木)	中日(朝刊)
8	故・齋藤真教授の脳腫瘍摘出手術の記録映像フィルム武田薬品工業の収蔵庫で発見 本学博物館に寄贈	9 .3(金)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
9	エクストラコミュニケーションズや本学教授ら「東海ウェブ・アクセシビリティ研究会」設立 ウェブ情報「バリアフリー」へ	9 .3(金)	中日(朝刊)
10	健康と医療フォーラム第5回シンポジウムが8月4日開催 上田実・医学系研究科教授ら「ここまで来た未来の医療技術」をテーマに意見交わす	9 .3(金)	日経(朝刊)
11	本学漕艇部:理系学生が多く女性が上位に	9 .3(金)	中日(朝刊)
12	時のおもりの池内了・理学研究科教授「そこそこ」で知る満足感	9 .6(月)	中日(朝刊)
13	5日午後の2度にわたる地震について 平原和朗・環境学研究科教授コメント「双子地震ではないか」	9 .6(月)	毎日(朝刊)
14	「日本数学コンクール」「日本ジュニア数学コンクール」開催 数学コンクール問題作成委員長・安本雅洋・情報科学研究科教授「表現力の向上を」	9 .6(月)	中日(朝刊)
15	手を携えて 口唇口蓋裂・モンゴル医療援助:本学含む愛知県内5大学がモンゴル医療水準向上に向けて協力	9 .6(月) 9 .8(水)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
16	名大サロンの主役:中西久枝・国際開発研究科教授 中東の混乱は続く	9 .7(火)	中日(朝刊)
17	がん治療の飛躍的向上目指し、医学部放射線科「重粒子線治療センター」設立計画 石垣武男・医学系研究科教授ら産学連携「アイナック」設立へ	9 .7(火)	中日(朝刊)
18	祖父江逸郎・本学名誉教授「臨床のセンス」出版	9 .7(火)	読売
19	放送大学 公開講演会11日開催 足立きぬ糸・医学部附属病院看護師長「医療は誰のもの」をテーマに講演	9 .8(水)	読売
20	家森信善・経済学研究科教授と多和田眞・経済学研究科教授 東海三県の企業対象に「産業クラスターと金融構造に関する意識調査」実施	9 .9(木)	中日(朝刊)
21	「地震と土砂災害フォーラム」が8日開催 安藤雅孝・環境学研究科教授ら6人の意見交換など	9 .9(木)	中日(朝刊)
22	文部科学省「がんトランスレーショナル・リサーチ事業」中部大学教授・小林猛・本学名誉教授ら10課題採択	9 .9(木)	日刊工業
23	老年学:井口昭久・医学部附属病院院長「死に方」選べる環境を	9 .9(木)	朝日(朝刊)
24	文学研究科教授会は8日、文学研究科長に杉山寛行教授を選出	9 .9(木)	中日(朝刊) 読売
25	読売新聞社とNHK主催「ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム『21世紀の創造』」11月に全国4都市で開催 理化学研究所理事長・野依良治・特任教授参加	9 .10(金) 9 .22(水)	読売
26	愛知県医師会健康教育講座「インフルエンザ」 木村宏・医学部附属病院講師の講演	9 .10(金)	朝日(朝刊)
27	名古屋市民大学講座「持続可能な社会をめざした取り組み～環境にやさしい未来に向かって」10月13日から12月22日までの毎週水曜開催 本学などの教員が日替わりで廃棄物利用の研究など報告	9 .10(金)	毎日(朝刊)
28	地震時の報道、各局の対応を振り返る 福和伸夫・環境学研究科教授コメント「メディア同士の役割分担工夫を」	9 .10(金)	朝日(夕刊)
29	アップデート:茂登山清文・情報科学研究科助教授 アートの旅に出かけよう	9 .10(金)	朝日(夕刊)

	記事	月日	新聞等名
30	東海医療情報ネットワークコンソーシアム設立式典と設立記念シンポジウム11日開催 本学医学部脳神経外科学教室(吉田純・医学系研究科教授)が中心となって開発した「脳卒中救急医療情報ネットワーク」のノウハウ生かす	9.11(土)	中日(朝刊)
31	5日の地震についてコメント:鷲谷威・環境学研究科助教授「日本周辺初観測 珍しいタイプ」	9.11(土)	読売
32	東海地方8月の地震 災害対策室・林能成助手	9.11(土)	読売
33	「関東・東海合同第一回防災ユースフォーラム」11日に一泊二日の行程で本学で開催	9.12(日)	中日(朝刊)
34	東海自治体問題研究所(理事長:市橋克哉・法学研究科教授)が小冊子「『東海豪雨』の教訓を考える」発行	9.12(日)	中日(朝刊)
35	「広い宇宙に地球人しか見当たらない50の理由」書評 池内了・理学研究科教授	9.12(日)	サンケイ
36	情報伝達に重要なたんぱく質が細胞の形の変化を制御していることを解明 理化学研究所、東京大学、本学貝淵弘三医学系研究科教授ら	9.14(火)	日刊工業
37	経済教室:地域金融機関の勝ち残り策は顧客を知ることが重要 家森信善・経済学研究科教授	9.14(火)	日経(朝刊)
38	名古屋大学COE「統合テキスト科学の構築」第16回オープン・レクチャー 文学研究科 COE オフィスで29日開催	9.14(火)	中日(朝刊)
39	医学部医学科公開講座「動物から感染する新しい病気」10月8日開催	9.14(火) 9.21(火)	毎日(朝刊) 日経(夕刊)
40	教育学部 前期授業の一部を一般市民に公開 学生と社会人が共に受講	9.14(火)	中日(朝刊)
41	学生街ダンス:「きりんの会」医学生が本学医学部附属病院総合診療部の協力の下設立した基本的臨床技能の勉強会	9.14(火)	中日(朝刊)
42	「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」本学法科大学院など63件選定	9.15(水)	中日(朝刊) 読売
43	学ぶはくむ:生田幸士・工学研究科教授「ロボットコンテスト」講義 創造性教育の一環	9.15(水)	読売
44	日露戦争開戦から100年 見直される裏舞台の交流 堀田慎一郎・大学文書資料室助手「名古屋でも自由な捕虜の生活あった」	9.15(水)	中日(朝刊)
45	本学や岐阜大学、民間企業など産学官連携で間伐材や建築廃材の再利用目指す「木粉研究会」発足	9.16(木)	日経(朝刊) 中日(朝刊) 朝日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
46	我が青春の母校:名古屋大学 地域に根ざし130余年歩む	9.16(木)	毎日(朝刊)
47	あそびのα:故・勝沼精蔵・元総長の寄贈レコード中部大学の三浦記念図書館に保存	9.16(木)	朝日(朝刊)
48	高井治・エコトピア科学研究機構教授ら人工血管など作る培養チップ製造のベンチャー企業「エヌ工房」設立	9.17(金)	日経(朝刊) 朝日(朝刊) 日刊工業
49	第37回医学研究特別助成として横田充弘・医学部医学科助教授らに100万円贈呈	9.17(金)	毎日(朝刊)
50	教育学部公開講座 後期授業の一部公開 受講生募集	9.17(金)	朝日(朝刊) 中日(朝刊)
51	大マゼラン銀河の中に星のない巨大分子雲発見 福井康雄・理学研究科教授らの研究グループ	9.18(土)	中日(朝刊) 日経(朝刊)
52	日本数学会 幾何学賞に納谷信・多元数理科学研究科助教授ら	9.18(土)	中日(朝刊)
53	あいちの散歩道:本学東山キャンパス「知的好奇心」も刺激	9.18(土)	中日(朝刊)
54	「愛・地球博」に展示するマンモス上半身骨格ほぼ発掘 展示方法の検討に中村俊夫・年代測定総合研究センター教授など専門家九人	9.19(日)	読売
55	愛・地球博「ロボフェスタ2005」準備着々 実行委員長・大熊繁・工学研究科教授「ロボット研究はこんなに面白いとアピールしたい」	9.19(日)	読売
56	燃え尽きる前の星が赤く輝く現象を本学など開発の近赤外線カメラで確認	9.21(火)	中日(朝刊)
57	第7回名古屋大学高等研究院セミナー 28日開催	9.21(火) 9.22(水)	中日(朝刊) 読売
58	万博記念国際フォーラム「21世紀の環境調和型持続可能性社会構築に向けて」を来年8月6日・7日に本学で開催決定	9.22(水)	読売
59	東京大学地震研究所 長周期振動の発生観測 福和伸夫・環境学研究科教授「地震は震度だけでなく、周期と揺れの時間も重要な要素」と指摘	9.22(水)	毎日(朝刊)
60	講義としての芸術 茂登山清文・情報科学研究科助教授ら 豊田講堂で1日~10日開催	9.22(水)	朝日(夕刊)
61	医学の現場から:骨の形成と治療 BMPをテーマにした国際会議で松山幸弘・医学部附属病院講師が臨床試験結果発表	9.24(金)	中日(朝刊)
62	第36回全日本大学駅伝対校選手権大会東海地区選考会 男子は四日市大学と本学が代表に決定	9.24(金)	朝日(朝刊)
63	大学院留学生特別コース学位記授与式を24日に開催	9.25(土)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
64	万博記念国際フォーラムのかじ取り役 松井恒雄・エコトピア科学研究機構長に聞く	9 25(土)	読売
65	伊藤繁・理学研究科教授ら協力のもと、愛・地球博「モノづくりランド シンフォニア」で展示されるアラスカの植物が日本へ	9 25(土)	朝日(朝刊)
66	アイソトープ総合センター協議会で西澤邦秀・アイソトープ総合センター教授をセンター長に再任	9 25(土)	中日(朝刊)
67	2004毎日健康フォーラム「眠りのすすめ～不眠症からの脱却を目指して」12日に開催 太田龍朗・本学名誉教授ら参加	9 26(日)	毎日(朝刊)
68	故・飯島宗一・元総長の蔵書や草稿などの資料を学内保存することに決定	9 27(月)	中日(夕刊)
69	大きく膨らむ「夢のたまご塾」8月にプレセミナー開催 佐藤修二・理学研究科教授や末松良一・工学研究科教授ら13人が講義	9 27(月)	中日(朝刊)
70	「2004年北海道提言賞」優秀賞に奥野圭太郎さん・本学農学部学生	9 27(月)	毎日(朝刊)
71	工学系研究者の研究シーズを紹介するイベント「テクノ・フェア名大2004」30日に開催	9 27(月) 9 28(火)	日刊工業 中日(朝刊)
72	米学術情報会社トムソンサイエンティフィック日本事務所 科学技術の最先端分野で影響力が大きい論文を執筆、貢献したと考えられる日本人科学者に水野猛・生命農学研究科教授ら16人選定	9 28(火)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
73	「親子で学ぶ地震防災講座」26日開催 福和伸夫・環境学研究科教授「地震に負けるな」テーマに講演	9 28(火)	毎日(朝刊)
74	学生街ダンス：橘和希さん・本学3年生 人力飛行機に挑戦	9 28(火)	中日(朝刊)
75	肺がん治療薬「イレッサ」転移性胃がんにも効果あり 中西速夫・愛知県がんセンター研究所腫瘍病理部室長と研修生・横山裕之さん・本学医学部病態制御外科学所属らが発表	9 29(水)	中日(朝刊)
76	「ロボット技術の進歩と将来」と題して福田敏男・工学研究科教授の講演、30日のテクノ・フェア名大2004で開催	9 29(水)	日刊工業
77	04年度革新的原子力システム技術開発の採択課題として文部科学省は8件決定 本学は実施機関の一つ	9 29(水)	日刊工業
78	医学部保健学科の公開講座「こころの癒やしとコミュニケーション」4回開講	9 29(水)	サンケイ
79	10月2日に本学法科大学院入学説明会	9 29(水)	中日(朝刊)
80	運動器フォーラム2004名古屋 本学含む6大学と愛知県整形外科医会が主管	9 29(水)	中日(朝刊)

名誉教授の研究資料等の恵贈について

先日の一部報道で、「名古屋大学は原則的に名誉教授らの個人的な資料を受け入れてない」との表現がありましたが、名誉教授が培ってきた研究は、本学にとって貴重なものですので、今後とも資料の提供をよろしくお願いいたします。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部総務広報課広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

③〇 齋藤 眞 (さいとう・まこと) 日本における脳神経外科学のパイオニア

齋藤眞 (1889～1950年) は、1911 (明治44) 年に第二高等学校を卒業後、東京帝国大学医科大学医学科に入学しました。そして1915 (大正4) 年に同医学科を卒業、翌年には東京帝国大学医科大学副手になるとともに医師免許証を下付されています。齋藤が、本学医学部の前身である愛知県立医学専門学校講師ならびに県立愛知病院の外科第二部長心得に就任したのは1917年のことでした。

齋藤の専門は脳外科学で、1920年には同医学専門学校教授ならびに同愛知病院外科第二部長職を依願退職したのち、自費でヨーロッパへ渡航し、1924年に帰国するまでウィーン大学、ベルリン大学、パリ大学で病理学と脳外科学の研究に従事しました。この間、齋藤は1922年に愛知医科大学教授に就任しています。

帰国後も、齋藤は脳神経外科における数多くの優れた研究業績を上げ、1929 (昭和4) 年8月には、ハワイ・ホノルルで開催された第1回汎太平洋外科学会に日本代表として出席し、自身の手になる脳外科の映像を披露しています。また、齋藤は医学教育や学会活動にも意欲的で、1948年には現在の日本脳神経外科学会の前身である日本脳神経外科研究会の発足に尽力し、1949年の第3回総会まで同研究会の会長を務めました。

なお、本学の博物館では現在、齋藤眞の生涯・研究業績と当時の名大医学部の歴史を取り上げた第4回企画展「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞」(10/13～11/12) を開催しています。



齋藤 眞 (1949年撮影)



齋藤の設計による外科講堂での臨床講義風景



博物館「齋藤眞」展ポスター

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室 (052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp) へご連絡下さい。